

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：25201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593552

研究課題名(和文)脳血管障害患者と家族に対する退院支援プログラムの臨床活用性の検証

研究課題名(英文)A study of the possibility of practical use of the family nursing interventions program for medical treatment support for cerebrovascular accident patients and caregivers

研究代表者

梶谷 みゆき (kajitani, miyuki)

島根県立大学・看護学部・教授

研究者番号：00280131

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、構築した回復期脳血管障害患者と配偶者の対する退院支援プログラムの臨床での活用性と有効性を明らかにすることである。プログラムは、患者と配偶者を対象に「情緒の安定化」と「療養生活における目標の共有化」を図る内容である。発症後1～2か月の対象者に、計3回の面談を看護師が実施し、彼等の療養生活の確立を支援する。

対照群(通常看護ケアのみ)8例と介入群(通常看護ケア+プログラム)8例から得た家族機能や自尊感情のデータを分析した結果、介入群の方が家族機能の回復・維持が図られており、患者と配偶者それぞれの自尊感情も維持・向上していた。今後さらに事例を重ね、有効性を検証する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to evaluate the possibility of practical use and effectiveness of the family nursing interventions program for cerebrovascular accident (CVA) patients in rehabilitation during the recovery stage and caregivers. This program aimed at supporting to establish life for their medical treatment by stabilizing their emotional health and sharing a goal of life for their medical treatment. One to two months had passed since onset of CVA. Nurses interviewed CVA patients for three times and supported to establish life for their medical treatment.

The authors compared eight control groups (usual nursing care only) with eight intervention groups (application of the program to usual nursing care) with respect to family function and self-esteem. As a result, family function and self-esteem of both a patient and a caregiver improved more in the intervention than the control group. More cases are needed to evaluate the effectiveness of this program.

研究分野：老年看護学

キーワード：家族看護介入 家族機能 脳血管障害 FAD プログラム評価

## 1. 研究開始当初の背景

わが国の脳血管障害患者や介護者に関する研究は、老年社会学や社会福祉領域そして看護学の領域を中心に患者の障害受容過程や家族の障害受容過程に関する研究、介護者が介護を意味づけていく過程に関する研究、在宅療養における介護負担感に関する研究、患者と家族のケアニーズに関する研究などが1990年代から蓄積されてきた。これらの研究成果から、在宅療養が維持できる要件として、患者の機能障害を中心とした身体状況の安定、患者と介護者の的確な現実認識、

患者と介護者の密接なコミュニケーションや意志の疎通などの重要性が明らかにされてきた。それによって脳血管障害患者と家族の理解を促進する知見が得られてきた。

しかし、脳血管障害発症直後の混乱している患者と家族に直接的に介入して問題解決を図ったり、患者と家族の意思決定を支援するような看護介入の技術や、実施した看護介入の評価に関する研究は少なく、効果的な看護介入手法や看護介入の客観的な評価に関する研究は立ち遅れている。

研究代表者は、脳血管障害患者と家族の療養支援のための看護実践について継続的に研究を重ねてきた。

「脳血管障害発症後の混乱期における家族機能障害への看護介入とその評価」(平成18-20年度科学研究費補助金取得：課題番号18592402)の研究において、「感情の安定化」と「療養生活における二者間の目標の共有化」に主眼をおいた退院支援のための看護介入プログラムを検討した。

「脳血管障害患者と家族の退院支援における看護介入プログラムの構築」(平成21-23年度科学研究費補助金取得：課題番号21592938)の研究で、脳血管障害患者と家族の退院支援に資する看護介入プログラムを構築した。

## 2. 研究の目的

本研究では先の で構築した、回復期脳血管障害患者と家族の退院支援プログラムの臨床活用性ならびに有効性を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1)対象

脳血管障害を発症(初発)し、医療施設に入院中の患者とその配偶者

患者には運動機能障害(麻痺)や言語障害(失語症、構音障害)、嚥下障害などの後遺症があり、退院後介護を要する状態にあること。なお、重度の意識障害(JCS 度以上)や高度の言語障害や高次脳機能障害があり、自らの意思を表現することや看護師とのコミュニケーションが困難な事例、身体的状況等で主治医が研究継続は困難

であると判断した場合は除外する。

研究協力依頼に対して自由意思による同意が患者と配偶者の双方から得られている。

対照群(通常看護ケア)10例

介入群(通常看護ケア+プログラム)10例

### (2)退院支援プログラム

脳血管障害発症後1か月~3か月の間に、研究協力看護師による面談を2~3週間の間隔で計3回行う。1回の面談は60~90分。

介入評価は、Family Assessment Device (FAD: Epstein; 1983 佐伯; 1997)を用いた家族機能評価と、自尊感情尺度 (RSE: Rosenberg's Self Esteem; 1965, 山本他; 1982)による量的な評価ならびに、患者と配偶者の行動や認識の変化などに対するそれぞれの自覚や研究者の参加観察結果を質的データとして、質量のミックス法にて評価する。

### プログラムの具体的展開

【介入前】FADによる家族機能評価

自尊感情の評価

- 1回目：ジェノグラム記載、家族の全体像把握 家族看護アセスメント 発症からの経過や療養について語りを聞く 感情の安定化
- 2回目：療養生活における教育的介入 患者と配偶者のコミュニケーション促進、家族機能改善への介入
- 3回目：患者と配偶者のコミュニケーション促進、療養生活における目標の共有化

【介入後】FADによる家族機能評価

自尊感情の評価

### (3)展開方法

脳神経疾患回復期リハビリテーションを実施している医療施設をフィールドとして、研究協力看護師(本退院支援プログラムの研修を受けた看護師)が、研究協力の同意を得た患者と家族(配偶者)に、構築した「退院支援プログラム」を展開する。

群の選別は、随時研究協力の同意を得た事例で選択し、群間の差が生じないよう年代や機能障害のレベルでマッチングさせる。

### (4)倫理的配慮

研究フィールドとなる医療施設の管理者および看護管理者に、文書で協力を依頼し同意を得た。

医療施設からリストアップされた患者と配偶者には、研究者が直接面会し、研究の趣旨や方法について文書と口頭で説明した。患者と配偶者双方からの同意書の提出をもって同意とした。一旦同意した後、研究途上での辞退についても保障した。

#### 4. 研究成果

対象は対照群 6 事例，介入群 6 事例を，表 1 のように，発症からの日数，FIM による生活機能のレベル，年齢でマッチングし，2 群はほぼ同じ群であると判断した。

対照群の患者は男性 2 名，女性 4 名，平均年齢 62.2 歳，FIM は平均値で 104 点が 114 点に改善した。配偶者の平均年齢は 63.3 歳であった。

介入群の患者は男性 3 名，女性 3 名，平均年齢 68.2 歳，配偶者は 66.3 歳であった。FIM は平均値で 74 点が 98 点に改善した。介入群に対しては疾患や障害，夫婦の歴史や家族の強み，今後の療養生活などに対する語りを中心に面談を行った。初回面談日は平均で発症から 96 日目，平均面談回数は 3.0 回，1 回の平均面談時間は 40～50 分であった。

対照群の患者の FAD は，情緒的反応性，情緒的干渉，行動特性の項目で 2.0 以上を示し，特に情緒的な側面で機能低下が認められた。配偶者は，意思疎通，情緒的反応性，情緒的干渉，行動制御で 2.0 以上を示した。発症から約 2 か月経過しても情緒面を中心に家族機能の低下が継続していた。RSE は患者は微減，配偶者は 35 点が 30 点に大きく減じていた。介入群の患者は情緒的反応性，情緒的干渉，行動制御で 2.0 異状を呈したが，介入後情緒的干渉以外は，改善した。配偶者は情緒的反応性で，介入前 2.0 以上だったが介入後 1.0 点台に改善を認めた。RSE は患者配偶者ともに介入後わずかに改善した。

本プログラムによる看護介入は，患者と配偶者の家族機能の改善に効果をもたらす可能性があることが示唆された。今後，対象数を重ね統計的有意差を明らかにする。

表 1 対照群と介入群のマッチング  
発症後平均日数

対照群 6 事例	面談 1 回目	79 日
	面談最終	112 日
介入群 6 事例	面談 1 回目	96 日
	面談最終	144 日

FIM 合計点平均

対照群 6 事例	入院後	104 点
	面談最終	114 点
介入群 5 事例	入院後	74 点
	面談最終	98 点

平均年齢

対照群 6 事例	患者	62.2 歳
	配偶者	63.3 歳
介入群 6 事例	患者	68.2 歳
	配偶者	66.3 歳

表 2 対照群の家族機能と自尊感情

	患者 初回	患者 2 回 目	家族 初回	家族 2 回 目
問題解決	1.97	1.95	1.77	1.92
意思疎通	1.58	1.75	2.09	1.94
役割	1.76	1.70	1.96	1.76
情緒的反応性	2.40	2.50	2.33	2.18
情緒的干渉	2.06	2.28	2.11	2.14
行動制御	2.00	2.01	2.24	2.18
全般的機能	1.67	1.66	1.83	2.09
自尊感情	36	35	35	30

表 3 介入群の家族機能と自尊感情

	患者 初回	患者 2 回 目	家族 初回	家族 2 回 目
問題解決	1.96	1.96	1.90	1.79
意思疎通	1.84	1.83	1.98	1.74
役割	1.60	1.71	1.69	1.53
情緒的反応性	2.10	1.91	2.03	1.83
情緒的干渉	2.03	2.18	1.74	1.64
行動制御	2.00	1.94	1.85	1.87
全般的機能	1.67	1.85	1.78	1.72
自尊感情	36	38	33	34

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

梶谷みゆき：家族機能改善をめざす回復期  
脳血管障害患者と配偶者への看護介入  
日本看護研究学会中国四国地方会第28回  
学術集会，2015.3，出雲市

〔図書〕(計1件)

- 1) 梶谷みゆき(共著)，百田武司，森山美知子編集：エビデンスに基づく脳神経看護ケア関連図，梶谷担当部分「脳血管障害のリハビリテーション」 292-301 中央法規，2014.
- 2) 梶谷みゆき(企画編集)：特集 脳神経外科患者・家族の心理的ケア，B R A I N，Vol.3 No.4 (July&August)，290-345，2013.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

梶谷 みゆき(Kajitani miyuki)  
島根県立大学看護学部看護学科  
教授  
研究者番号：00280131

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

## (3)連携研究者

森山美知子(Moriyama michiko)  
広島大学大学院医歯薬保健学研究院  
研究者番号：80264977